



フランス最新留学事情（リヨン編）

加藤 靖恵（フランス文学第2）

名古屋大学では各国に数多くの協定校を持ち、交換留学が近年ますます盛んです。今年も研究室から学部3回生の富田美咲さんと松原晶さんが、フランス第2の都市リヨンに8月末より滞在中です。9月末の土曜日、旧市街（世界文化遺産）の「ブション」で伝統的的地方料理を味わい、ソーヌ川沿いの古本市をひやかした後、ベルクール広場近くのカフェでお話を伺いました。



「なぜリヨンに？」お二人は2年生のときにフランス語実用試験TCFのB1に合格し、文系学部が有名なリヨン第3大学を選びました。パリ以外の地方でできるだけ大きな都市がよかったそうです。人が親切な上、文化施設も多く、満足しているご様子でした。

「名大で学んだフランス語は通じますか？」今のところフランス語を話す機会が少ないというショックなお答えでした。留学生仲間とはまだ英語が多く、交流のある日本語学科のフランス人学生は日本語が上手すぎるそうです。それでもなるべくこちらからフランス語で話すように努力しているとのこと。別れ際に私の旧友が合流した際は、2人ともフランス語で元気に受け答えしていました。

「大学生活で困っていることは？」週2コマの留学生向けの授業以外は文学部の正規の授業に出ており、フランス語を聞き取るのがとにかく大変だそうです。フランス人は先生の説明の全文をそのまま書き写す人が大半で、教室には彼らがキーボードをひたすら叩く音が響いているとのこと。（フランス某大学の先生に聞くと、本当は重要な箇所のみメモをとる訓練をしてほしいが、それができる学生が少ない、と逆にこぼしていました。）

留学生仲間と話たびに各国と主要都市についてもっと知っておけばと思う、また日本語学科の学生が自分たちより日本の漫画、アニメやポップスに詳しいので、逆に申し訳なくなる、など反省点や今後の計画についても語っていただきました。1年たってさらに成長したお二人に再会するのが楽しみです。



分野・専門紹介—File15

社会・文化の新しい現象を発見します。

分野・専門名：文化動態学

皆さんは我々が生きている社会や文化的規範がどのように変化していくか考えたことがありますか。文化動態学は、2017年度から新設された専門分野です。この分野に所属している教員は、歴史学、文化人類学、社会学などの複数の学問領域にかかわった授業をしています。日々、新しい技術が生まれ、我々の生活が便利になっていく中で、文化的規範、慣習、伝統行事などが変容しはじめ、様々な新しい現象が生まれつつあります。授業では、文化と文化の交流が国際社会にどのような影響を与えているか、どういう時に個人や集団の活動がナショナリズムの高揚の原因になっているか等、検討しています。

この分野の主要な焦点の一つは移民とマイノリティです。生まれた地域や国を離れ、異なる文化環境で暮らす人々は、年々増えています。同じ文化の人々に囲まれ、自分がどのような文化に帰属している

か考えたことのなかった移動者は、新しい地で生活をしていくなかで、人々と接触し、共に働き、共に生活を営み、自分とは異なる文化の人と結婚し、次第に自分のアイデンティティについて考え始めます。



また、移動者は受け入れ社会に貢献し、自分の文化を紹介していきます。移民を受け入れている社会の側でも、他者との接触を通じて社会関係は変容し、統合や排除をめぐる動きが生まれてきます。例えば、アルゼンチンでは、移民がタンゴというダンスを生み出しています。

文化動態学の授業では様々な理論を学び、あらゆる文献、資料を読むことによって社会変容の諸側面をより深く理解しようとしています。それに限らず、自らインタビューを実施し、集めたデータを分析し、これまで誰も学んでこなかった問題についても明らかにします。学部には文化動態学の授業がありませんが、社会と文化の変容にご関心を持っている方、是非授業を受講してみてください。
(蝶野 智之・前期1年)

分野・専門紹介—File16

価値観が変わる瞬間

分野・専門名：社会学

社会学を専攻していてよく聞かれる質問があります。「社会学って何するの?」。様々な答え方があり、どれも間違いではありません。社会学では、例えば「なぜブラック企業はなくなるのか」というように、自分の明らかにしたい問題を決めたら、何が真実なのか、あらゆる手段を使って研究します。経済、法律、政治といった区別はなく、自由に追究して良いのです。



主な活動内容として、個人が自身の興味・関心に沿って行う個人研究、チームで行う社会学調査実習があります。個人研究では、自由にテーマを設定して調査を行うことができます。自由であるということは、選択肢に制限がなく、何をすればいいか道に迷ってしまうかもしれません。しかし自分の価値観・正義感に従って、「自分にとって何が重要か」を考えることで、自分の人生で本当に大切なものに気づくことができます。そして、先人たちの知恵を借りながら、自ら現場に足を運び、そのテーマを自分の力で明らかにしていきます。

社会学調査実習では、設定されたテーマをチーム全員で明らかにしていきます。昨年度は「仕事と子育ての両立」というテーマで調査を行いました。質問紙調査のデータ分析、企業の人事部へのインタビューを通じて、現在の働く女性を取り巻く子育て環境が明らかになっていきました。調査実習で鍛えられるのは「チームワーク」です。各々のメンバーは長所と短所を持っていて、互いにそれを補い合うことで、一つの洗練された作品が完成されていきます。1+1の個人の知識が、チームによって3にも4にもなっていく面白さを実感できます。

ぜひ、社会学研究室で仲間刺激を受けながら、自分流の「社会学」を実践してみませんか。

(山田 郁大・学部3年)

最近の文学部

新年特集号(?)は1月30日刊行予定です。

冒頭インタビューのお二人より、最近は現地の人とフランス語で交流する機会をどんどん増やしていると連絡がありました。日本の私たちも負けずに楽しいクリスマスを迎えましょう。受験生の皆さんは体に気をつけて追い込み頑張ってください。

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/> まで(『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)